

顯立正意抄

文永一一年一二月二五日 五三歳

日蓮去ぬる正嘉元年太歳八月二十三日、大地震を見て之を勘へ定めて書ける立正安  
 国論に云はく「薬師經の七難の内五難忽ち起こって二難猶残れり。所以他国侵逼の  
 難・自界叛逆の難なり。大集經の三災の内二災早く顯はれ一災未だ起こらず。所以兵革  
 の災なり。金光明經の内の種々の災禍一々に起こると雖も、他方の怨賊国内を侵掠す  
 る此の災未だ露はれず此の難未だ来たらず。仁王經の七難の内六難今盛んにして一難未  
 だ現ぜず。所以四方の賊来たりて国を侵すの難なり。加之国土乱れん時は先づ鬼神  
 乱る、鬼神乱るゝが故に万民乱ると。今此の文に就いて具に事の情を案ずるに、百鬼  
 早く乱れ万民多く亡ぶ。先難是明らかなり、後災何ぞ疑はん。若し残る所の難、悪法の科  
 に依って並び起こり競ひ来たらば其の時何がせんや。帝王は国家を基として天下を治  
 め、人臣は田園を領して世上を保つ。而るに他方の賊来たりて此の国を侵逼し、自  
 界叛逆して此の地を掠領せば豈驚かざらんや豈騒がざらんや。国を失ひ家を滅せば何  
 れの所にか世を遁れん」等云云已上立正安国論の言なり。

今日蓮重ねて記して云はく、大覺世尊記して云はく、苦得外道は七日有って死すべし、  
 死して後食吐鬼に生まれん。苦得外道の言はく、七日の内には死すべからず、我羅漢を  
 得て餓鬼道に生まれじ等云云。瞻婆城の長者の婦懷妊す。六師外道の云はく、女子を生  
 まん。仏記して云はく、男子を生まん等云云。仏記して云はく「却って後三月あって我  
 当に般涅槃すべし」等云云。一切の外道云はく、是妄語なり等云云。仏の記の如く二月十  
 五日に般涅槃し給ふ。法華經の第二に云はく「舍利弗、汝未来世に於て無量無辺  
 不可思議劫を過ぎて、乃至当に作仏するを得べし。号をば華光如来と曰ん」等云云。又  
 第三の巻に云はく「我が此の弟子摩訶迦葉未来世に於て当に三百万億に奉觀すること  
 を得べし。乃至最後身に於て仏と成ることを得ん。名をば光明如来と曰ん」等云云。又  
 第四の巻に云はく「又如来滅度の後に若し人有って、妙法華經の乃至一偈一句を聞いて  
 一念も随喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を与へ授く」等云云。此等の經文  
 は仏未来世の事を記したまふ。上に挙ぐる所の苦得外道等の三事、符号せずんば誰か仏  
 語を信ぜん。設ひ多宝仏証明を加へ、分身の諸仏長舌を梵天に付け給ふとも信用し難き  
 か。今亦以て是くの如し。設ひ日蓮富楼那の弁を得て目連の通を現ずとも、勘ふる所  
 当たらずんば誰か之を信ぜん。去ぬる文永五年に蒙古国の牒状我が朝に渡来する所、

賢人有らば之を怪しむべし。設ひ其れを信ぜずとも去ぬる文永八年九月十二日御勘氣を蒙りしの時吐く所の強言、次の年二月十一日に符号せしむ。情有らん者は之を信ぜべし。何に況んや今年既に彼の国災兵の上二箇国を奪ひ取る。設ひ木石たりと雖も、設ひ禽獸たりと雖も感ずべく驚くべし。偏に只事に非ず。天魔の国に入って酔へるが如く狂へるが如し。歎くべし哀むべし、恐るべし厭ふべし。

又立正安国論に云はく「若し執心翻らず、亦曲意猶存せば早く有為の郷を辞して必ず無間の獄に墮ちなん」等云云。今符号するを以て未来を案ずるに、日本国上下万人阿鼻大城に墮せんこと大地を的と為すが如し。此等は且く之を置く。日蓮が弟子等又此の大難脱れ難きか。彼の不輕輕毀の衆は現身に信伏隨從の四字を加ふれども猶先謗の強きに依って先づ阿鼻大城に墮し、干劫を経歴して大苦惱を受く。今日蓮が弟子等も亦是くの如し。或は信じ或は伏し、或は随ひ或は従ふ。但名のみ之を仮りて心中に染まらざる信心薄き者は、設ひ干劫をば經ずとも或は一無間或は二無間乃至十百無間疑ひ無からん者か。是を免れんと欲せば各藥王・樂法の如く臂を焼き皮を剥ぎ、雪山・国王等の如く身を投げ心を仕へよ。若し爾らずんば五体を地に投げ遍身に汗を流せ。若し爾らずんば珍宝を以て仏前に積み。若し爾らずんば奴婢となって持者に奉へよ。若し爾らずんば等云云。四悉檀を以て時に適ふのみ。我が弟子等の中にも信心薄淡き者は臨終の時阿鼻獄の相を現すべし。其の時我を恨むべからず等云云。

文永十一年本歲十二月十五日

日 蓮 之を記す